



TITLE:

空間から時間へ：写像の動機付けと制約

AUTHOR(S):

碓井, 智子

CITATION:

碓井, 智子. 空間から時間へ：写像の動機付けと制約. 言語科学論集
2004, 10: 1-17

ISSUE DATE:

2004-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66979>

RIGHT:

空間から時間へ

～写像の動機付けと制約～

碓井智子

京都大学研修員

hitsuji77-lj@infoseek.jp

1. はじめに


私たちは如何にして抽象的な概念である時間を認知し、それらを言語化しているのか。これまで抽象概念である時間は認知が容易な空間を SD とした写像により認知され言語化されると考えられてきた。しかし空間と時間それぞれの持つどのような特性に類似性が見られ、一体何が写像の要因となったのかということは詳細に述べられていない。本稿では写像の要因を単に類似性とするのではなく、空間と時間の間にどのような共通の特性が見られ写像が起こったのかを明らかにし、さらに類型論の観点から時間ドメインへの写像の制約の存在を指摘する。

2. 言語学における時間

言語学において時間とはこれまでどのように捉えられ分析されてきたのだろうか。本節ではこれまでの言語学における時間論を概観し、時間の持つ特性を明らかにしていく。

2.1. Fillmore (1997)

Fillmore(1997)では時間を以下のように定義している。「時間は一次元的なものであり、且つ一方向性を持つ不可逆的なものである」確かに時間というものを認知主体無しの客観的なものとして捉えた場合、時間はこのように定義づけられるかもしれないが、あくまでもこれはニュートン等の考える絶対時間を記述したものであり、認知主体をそこに入れた場合、時間というものの定義自体が変わってくると考えられる。

(1) TIME  one-dimensional
unidirectional

the human mind as movement

"the world" as moving through time

"the world" as being constant and time passing by it.

(Fillmore1997:45)

さらに Fillmore は言語表現の中に人をいれた事例をあげ、その場合は(2)に示すように時間に方向付けが与えられることを指摘している。

(2) a Success lay *behind* them, failure lay *ahead* of them.

b. *Before* that time they were successful, *after* that time they were unsuccessful.

(Fillmore 1997:46)

時間に前後の方向軸を与え、過去が主体の背後に位置づけられ、未来が主体の前方に位置づけられるという時間認知の存在性を指摘している。そしてこの時間の捉え方は後の Lakoff and Johnson(1999)へと引き継がれていく。

2.2. Lakoff and Johnson (1980)(1999)

Lakoff and Johnson(1999)では時間を以下のように定義している。

(3) All of our understandings of TIME are relative to other concepts

→ Motion, Space and Events

TIME is not conceptualized on its own terms → Metaphorically and Metonymically

時間というものの自体を単体で認知し理解、言語化することは不可能であり、私たちは「動き」や「空間」や「イベント」といった実際に認知可能なものを媒体とし時間を認知しているとここでは指摘されている。そして時間を概念化するためには「メタファー」や「メトニミー」を使用せねばならず、またそれなしには時間を概念化することは不可能であるとしている。さらに時間そのものの持つ特性として彼らは以下の4点を挙げている。

(4) TIME ① Time is directional and irreversible

② Time is continuous

③ Time is segmentable

④ Time can be measured

(Lakoff and Johnson 1999:138)

彼らの分類は Fillmore に通じるところが多いが、大きく異なる点も見受けられる。彼らの定義はこうである。「時間とは方向性を持ち不可逆的なものである。そして連続性をもち、分けることができ、且つ量を量ることが出来るものである」Fillmore の時間の捉え方と大きく異なる点は、時間を単なる客観的な存在物として捉えているのではなく、その背景に時間を認知する認知主体の存在を示唆している点である。特に時間の持つ特性の③と④はその現れであるといえる。これまでの先行研究を元に本論では時間の持つ特性を以下のよう大きく5つに分類した。

『 時間の特性 』

- ① 時間の動的側面
- ② 時間の方向的側面
- ③ 時間の静的(順序的)側面
- ④ 時間の次元的側面
- ⑤ 時間の量的側面

図 1

次節ではこれらの時間の持つ特性を元に、時間認知がどのようにして行われそして言語化されているのかをみていく。

3. 動的な時間認知

時間を動的な動きをあるものとして捉え言語化するという時間認知は非常に多くの言語において見られる現象である。古来から時間の流れを川の流れになぞらえて日本においても俳句等が読まれていることからこの事実は明らかである。本節では時間を動きを持つものとして捉える時間認知の方法を見ていく。

3.1. 近接過去と近接未来

言語においてはフランス語のようにテンス形態にまで動く時間の認知が反映されているものもある。

- (5) Passe recent (近接過去) *venir de + inf* (ex) *Je viens de manger*
 Future proche (近接未来) *aller + inf* (ex) *Je vais manger*

フランス語には「近接過去」(現在から近い過去)と「近接未来」(現在から近い未来)を表すテンス形態が存在する。それが(5)に示したものである。「近接過去」を表す際は“*venir*”(come)が使用され、「近接未来」を表す際は“*aller*”(go)が用いられる。これは認知主体自身が時間軸上を過去から未来に向かって移動しているという時間認識が言語に現れたものであり、それがテンス形態として使用されている事例であるといえる。

- (6) Tense¹ → *venir* (come) → Moving Conceptualizer (Moving Ego, Moving Observer)
aller (go) → Moving Conceptualizer (Moving Ego, Moving Observer)

このように時間を動くものと捉える言語は非常に多く、Sweetser(1988)によると特に未来標識を表す際に“go”という動詞が使用される言語が非常に多いとされている。次節では英語に見られる未来標識“go”の文法化の過程を見ていく。

3.2. 未来標識としての“go”

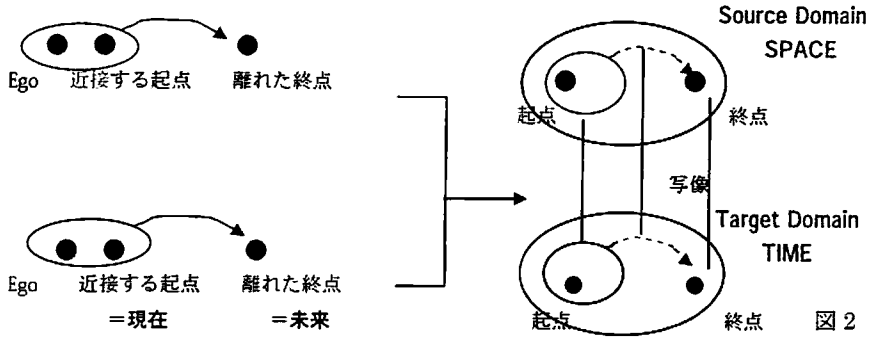
Sweetser(1988)では移動を表す動詞“go”は多くの言語において未来標識として使用される傾向があることを指摘している。英語における“be going to”が意図性や未来性を表すという事実もその一例であると位置づけている。それを図式化したものが次の図1にあたる²。動詞“go”は自己に近い起点から離れた着点への移動を表し、もともとは空間的な移動を表していた語である。本来空間的に前方へ移動することをあらわしていた“go”が、時間表現として未来標識となった背景には、我々が時間を動的なものと捉え、自己の前方に未来が位置すると時間を認知しているという事実がある。つまり前方への空間的移動が、自己の

¹ 11:55 → 12:00 *Il y a 5 minutes.* (There is ~)

² 書面の都合上図式は筆者により多少手が増えられている。

前方にある未来への移動であると概念化され、“go”が未来標識として使用されるようになったのである。

(7)



また Sweetser は同様の現象が英語以外の多くの言語にも見られるという事も指摘している。つまり時間を動的なものとして認知し言語化している言語が多く存在するというのがこの事実からも明らかである。そして時間を動くものとして認識する時間認知には「時間自体が動いていると認識されるもの」と「時間は静止しており認知主体自身が時間軸上を移動していると認識されるもの」の二種類があることを L&J(1980)が指摘している。次節では動的な時間における二種類の時間認知を考察する。

3.3 Time is Moving Metaphor

時間を動的なものとして捉え、その時間に方向性を持たせた認知方法を詳細に分析した研究に Lakoff and Johnson (1980)がある。L&J(1980)以降、時間認知にメタファーが深く関与していることが明らかとなり、メタファーなしには時間を認知、概念化することは不可能であると考えられるようになった。彼らが提示した事例は膨大であり、そのメタファーの種類も多い。それらのメタファーの中で中核を成すものが、時間を動きあるものとして捉える Moving Time Metaphor(MTM)と、認知主体が時間の中を移動していると捉えられる Moving Observer Metaphor(MOM)である。

3.3.1. Moving Time Metaphor

MTM とは時間が動きそれを認知主体が静止して試みているという時間認知を表したメタファーである。「動かない認知主体が存在し、彼は固定された方向を向いている。そして彼の前から後方へと物体つまり時間の連続が過ぎ去っていく。動いている物体、すなわち時間はその動きに方向性を持ち認知主体に前面を向けてこちらへと向かってくる」(Lakoff and Johnson 1999:141) これがレイコフらが MTM と呼ぶものである。そして空間からのメタファーによる写像関係を彼らは以下のように示している。

(8) THE MOVING TIME METAPHOR

Objects	→	Times
The Motion of Objects Past the Observer	→	The "Passage" of Time

(Lakoff and Johnson 1999:141)

さらに(8)のメタファーに時間に方向性を持たせるメタファーである Time Orientation Metaphor を当てはめると次のようになる。

(9) The Location of the Observer	→	The Present
The Space in Front of the Observer	→	The Future
The Space Behind the Observer	→	The Past
Objects	→	Times
The Motion of Objects Past the Observer	→	The "Passage" of Time

(Lakoff and Johnson 1999:142)

そして(9)の時間認知の構図から(10)に見られるような言語事例が生まれるとしている。

(10) Moving Time Metaphor

- | | |
|------------------------------------------------|-------------------------------|
| a. The time will come when ... | |
| <u>b. Coming up in the weeks ahead...</u> | |
| c. I look forward to the arrival of Christmas. | |
| d. I can't face the future. | |
| <u>e. The face of things to come.</u> | (Lakoff and Johnson 1999:143) |
| f. Next week and the week following it. | (Lakoff and Johnson 1980:43) |

(10)中の線は筆者によるものであるが、これは(10a)(10b)と(10c)～(10e)、さらには(10f)が一樣に動的な時間という観点から分析できるのかということを危惧したものである。つまりそこに動きを感じるかどうかには差があることを示している。ここで問題なのはレイコフらが TIME IS A MOVING OBJECT であるというメタファーと、時間は方向性を持っているという点を重要視しすぎたために、それらの特性をもつこのメタファーの中にあまりにも多くの事例がまとめられてしまっている点である。Observer が現在に位置していて時間が流れていると言う(9)のような構図は殆どみられない事例もある。また彼らは(10f)の事例において "the week following it" の部分のみを問題視しているが、同じ文章内にある "Next week" の "Next" という時間表現は無視している。"Next" には時間の流れのような動的なものは全く感じられず、どちらかというと非常に静的な時間の位置関係を表す語である。(10d) "follow" やその他 "precede" はもともと動詞から派生した形容詞でもあるため、確かに動きや方向性が感じられるが、(10f)の "Next" に関しては方向性という面ではニュートラルな状態である。このような動きや方向性を持たない言語事例を「動き」を前提として MTM としてひとまとめにしてしまうのは事実と反しているのではないだろうか。

3.3.2. Moving Observer Metaphor

MTM と同様に重要なメタファーが MOM である。Lakoff and Johnson(1999)において、時

間に関する二つの主要なメタファーとして前節の MTM と MOM があげられている。MTM が時間が動いていると認知されるのに対し、MOM は認知主体自身が固定された時間の中を移動しているように認知される。またこの場合、時間をあたかも景色のように認知することから MOM は TIME'S LANDSCAPE METAPHOR とも呼ばれている。

(11) THE MOVING OBSERVER METAPHOR

Locations on Observer's Path of Motion	—————→	Times
The Motion of the Observer	—————→	The "Passage" of Time
The Distance Moved By the Observer	—————→	The Amount of Time "Passed"

(Lakoff and Johnson 1999:146)

さらに MOM を TIME ORIENTATION METAPHOR にあてはめると次のようになる。

(12) The Location of the Observer	—————→	The Present
The Space in Front of the Observer	—————→	The Future
The Space behind the Observer	—————→	The Past
Locations on Observer's Path of Motion	—————→	Times
The Motion of the Observer	—————→	The "Passage" of Time
The Distance Moved by the Observer	—————→	The amount of Time "Passed"

(Lakoff and Johnson 1999:146)

そして以上の構図から次のような言語事例が生まれるとされている。

(13) Moving Observer Metaphor

- a. As we go through the year.
- b. As we go further into the 1980s.
- c. We're approaching the end of the year. (Lakoff and Johnson 1980:43-44)
- d. Will you be staying a *long* time or *short* time?
- e. Let's spread the conference *over* the weeks.
- f. I'll be there *in* a minute.
- g. He left *at* 10 o'clock. (Lakoff and Johnson 1999:146)

L&J(1980)においては MOM として典型的な事例である(13a)~(13c)をあげているが、L&J(1999)ではその拡張事例として(13d)~(13g)などのような事例も MOM の一例としてあげている。時間表現として使用される形容詞や前置詞等もすべて MOM によるものであるとしているが、これは形容詞がもつ特性や前置詞が持つ意味を全く考慮してない分析であり再分析する必要がある。

以上時間を動きあるものとして捉えるときに使用されているメタファーを二種類紹介したが、これらの表現は Moving Time Metaphor や Moving Observer Metaphor という時間の動的な側面のみを考慮したひとつのメタファーにより成り立っているのではなく、空間と時間の持つ様々な要因が階層をなし写像が起こっているということを4節において明らかにする。

3.4. 静的な時間認知

本節では時間はすべて動的に認知され言語化されるものではないという事実を類型論的観点から明らかにしていく。動的な時間以外に静的な時間認知が存在することを示唆したものに Comrie(1985)がある。ここでは様々な言語を元にテンス形態を大きく二種類に分類している。

(14) Bernard Comrie (1985)

① Relative Tense

Pure relative tense

Absolute relative tense : pluperfect, future perfect

② Absolute tense

Present tense

Past tense

Future tense

テンスには①Relative tense(相対的な時制)と②Absolute tense(絶対的な時制)とがあり、①は過去完了形や未来完了形のように時間軸上にある一時点が存在し、その時点よりも過去である、もしくは未来であるといったように相対的に時間が決まるものをさす。それに対し現時点から見て絶対的に過去、現在、未来がわかるような、一般的にテンスと呼ばれているものが②にあたる。さらに Comrie(1985)ではテンス形態をもたない言語の存在性も示唆している。

(15) Tenseless language の存在

- Burmese realis → present or past time reference
irrealis → future time reference
- Dyirbal verb inflection による tense はない by Comrie
- Yindy tense ではなく Aspect (完了/未完了)的対立 by Dixon
- Hoppi tense ではなく validity, aspect, mode による事実記述 by Sapir

(15)は Comrie(1985)に筆者が手を加えたものであるが、例えば Burmese 語では realis か irrealis かがテンスの役割をしており realis であれば現在もしくは過去を表し、irrealis であれば未来を表すとされている。Yindy 語にはテンス形態は存在せず、その代わりに担っているのが Aspect 的な対立、つまり完了相であるか、非完了相であるかという区別により過去、現在、未来を表し区別している。さらに Hoppi 語に至ってはテンス形態は存在せず、その代わりに validity, aspect や mode 等を用いてテンスを表している。このようなテンスをもたない言語において多く使用されているのが静的相対的な時間認知である。

(16) オーストラリア原住民語

→時間認知をする際、必ず RP を要する言語

「今日」を意味的焦点として持ち、これが「明日」や「昨日」を与える。

◎ Dyirbal 語

「朝」や「午後」をあらわす語はなく「今日の前半」と「今日の後半」があるだけ

である。

→「今」という時点を RP として絶えず認知している。

◎ Hindi 語

/ka/ 「昨日・明日」を両方あらわす。

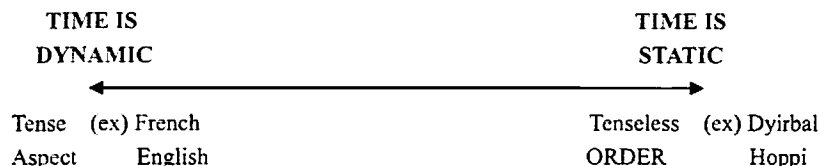
/ParsoM/ 「おとつい・あさって」を両方あらわす。

(ex) kal Aaj kal (昨日・今日・明日)

→/kal/は orientation はニュートラルであるが、/Aaj/(今日)を絶えず認知的参照点として用いていると考えられる。

例えば Dyirbal 語では現在を認知する際、必ず現在を参照するといわれている。今日という時点参照点としそれが明日や昨日を与えるのである。ここには時間が動いているという認識はなく、静的な時間の相対的な順序関係により時間を表している。また Hindi 語においても "kal" が昨日、明日を共に意味し、"ParsoM" がおとつ、明後日を両方表す。これらの語を認識するためには必ず今日という語を参照点として使用しなければならない。このように時間を動的に捉えない、静的な順序関係において時間を認識している言語も存在している。これは言語によりすみわけが存在するということ意味するのではない。言語によっては両方の時間認知(動的時間認知・静的時間認知)を持ち合わせていることが非常に多いのである。日本語もその一例であるといえる。それをまとめたのが(17)である。

(17) 類型論的に見た時間の認知方法



(17)は暫定的なものであり今後更なる検討が必要であるが、これまでの分析を元にと考えると時間を動的なものとして捉える傾向の強い言語はテンス形態にも動きが組み込まれているようなフランス語などがあげられ、それに対しテンス形態をもたず相対的な順序関係を用いて時間関係を表す Dyirbal 語や Hoppi 語などは時間を静的に捉えている言語である可能性がある。そして日本語や中国語などは両方の方法を持ち合わせている言語であるといえる。これまで欧米語中心の分析が多かったため時間の動的な部分のみが扱われてきたが、類型論的に見ると時間を静的に捉える言語も存在しているのである。次節からはこれらの事例を踏まえて、新たな観点から時間認知モデルの構築を目指す。

4. 時間の特性

本節では日英語を中心とした事例分析をもとに、時間の持つ特性を図3のように5分類している³。これまでの英語中心の先行研究(Lakoff and Johnson(1999))では主に①と②の特性に時間表現の事例すべてを集約して分析がなされてきた。しかし前節で見たように、類型論的観点から分析を行うと時間を動くものと認識しない「動き」を持たない時間表現とい

³ 今回の発表で主に取り上げるのは①～④の時間の側面である。⑤は提示するにとどまる。

うものの存在が非常に多いことがわかる。本論ではそれらの事例を元に動的な時間を再分析し、さらに静的な時間の認知方法を提示する。そしてこれまでは MOM(Moving Observer Metaphor)の一例とされてきた形容詞を次元性と方向性という新たな観点から分析し再分析を行う。

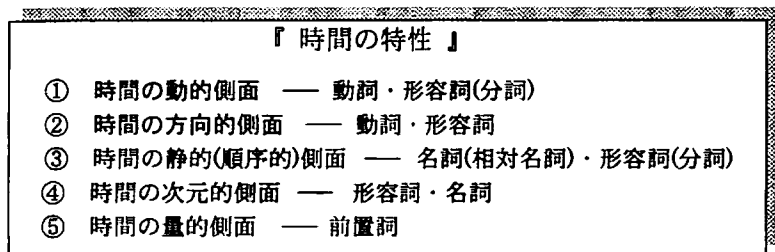


図3

5. Motivations & Constraints of Mapping

空間領域から時間領域へと写像が起こる際、両者の持つ類似性が動機づけとなり写像が起こることはこれまでの研究においても多く指摘されてきたが、写像の際の制約に関して分析を行ったものは少ない。本稿では図4に示したように時間認知モデルを多層構造を持つものとして捉えている。そこには一対一の写像関係ではなく、いくつかの複数の要因が重なり写像が起こったり、又制約がかかったりしている。それを示したものが図4である。図4においては時間の持つ特性として図5に挙げた5つの特性を挙げている。写像が起こる際、これらはすべてを要因として併せ持つ必要はなく、いずれかの側面を有していれば時間領域へ写像はおこる。その際、それぞれの側面において一定の制約が存在し、それにより写像が妨げられることもある。写像の動機づけや制約は多くの言語に一樣に見られるものもあるが、次元性や方向性に関しては文化差により異なる点もみられる。本稿ではこの図4を用いて、いかに時間領域へと写像が起こり、その際動機付けと制約が如何にかかるのかを明らかにしていく。

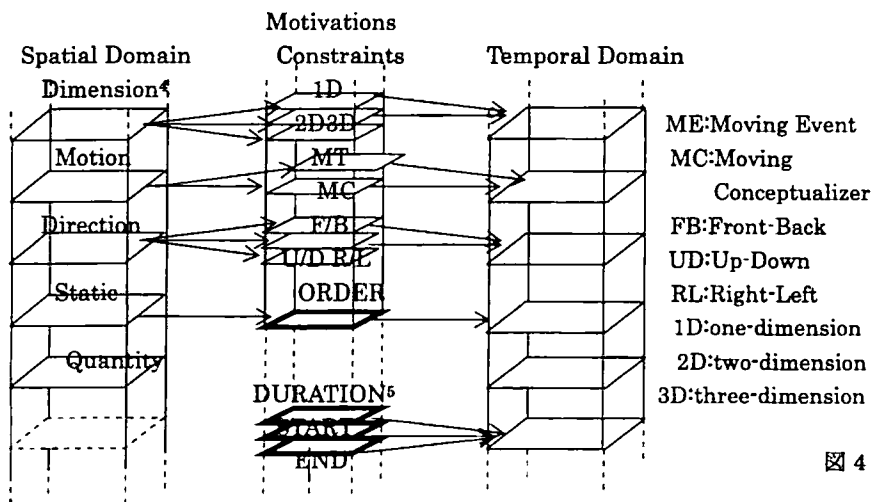


図4

⁴ DIRECTIONとDIMENTIONの写像過程に関しては文化差によるところが非常に大きい。

⁵ 時間前置詞(碓井 2004)を考える際に非常に重要な概念であるが、本論では提示するととめておく。

5.1. 動的・方向的側面

Lakoff and Johnson(1980)以降「私たちはメタファーを用いて時間を概念化し言語化している」と考え彼らによって多くの時間に関するメタファーが指摘された。その根幹をなすものが Orientation Metaphor(方向付けのメタファー)とその下位に位置づけられる Moving Time Metaphor と Moving Observer Metaphor である。彼らは時間に前後の方向付けを与え、さらに認知主体が時間が動くときと認知する場合と、認知主体自身が動く場合があることを指摘している。(18a)が前者の(18b)が後者の事例である。これらは図1に挙げた時間の持つ①動的側面と②方向的側面が現れた言語事例であると考えられる。この二種類の時間認知方法を本稿では図5-A 図5-Bのように図式化する。

(18) a. The time will come when...

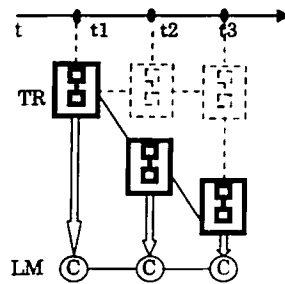
b. As we go through the year.

(Lakoff and Johnson 1980:138)

(19) a. 試験が近づいてきた

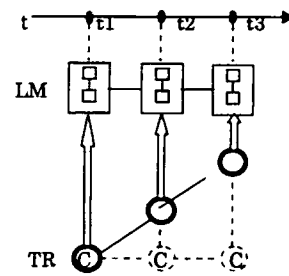
b. 人生の終わりに近づいて行く

(山梨 1995:50)



動的な時間認知①
「時間主体が移動」

図 5-A



動的な時間認知②
「認知主体自身が移動」

図 5-B

(18)や(19)に示したような時間表現の場合、認知主体が時間を図5-A、図5-Bのように捉え言語化し、さらに図6に示したような側面が動機付けとなり写像が起こっていると考えられる。この場合 MOTION と DIRECTION(FRONT-BACK AXIS)が動機付けとなっている。しかし中国語などでは MOTION と DIRECTION(UP-DOWN AXIS)が用いられることもあり、言語によりどの面や軸が用いられるかは今後さらに分析していく必要がある。

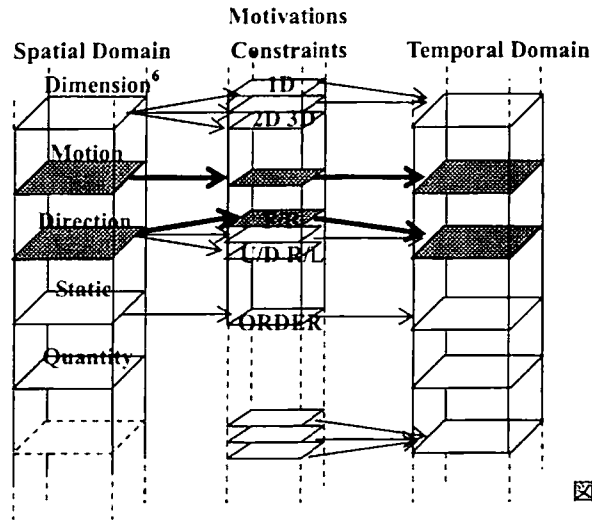


図 6

5.2. 静的側面

先行研究では動的な時間表現(MTM)として分析されていた(20)や(21)のような事例は本稿では前節に挙げたアジア・アフリカ諸国に多く見られる『順序』という概念を介した、静的時間認知(順序関係)の事例であると位置づける⁷。

- (20) a. *Next* week and the week *following* it.
 b. It had been fine the week *before*.
 c. I'd only seen him the *previous* day.

(Lakoff and Johnson 1999:143)

- (21) a. 卒業式の前に彼に会った
 b. 食事の後に歯を磨く

これらの事例を「順序」という概念を介したものであるとする根拠としては、「定冠詞の存在」と参照点マーカーである「の」の存在が挙げられる。(20a)(20b)は以前は動的な時間の事例とされてきたが、(20b)には動きを感じられないというアンケート結果を得た。これは(20a)「following」が動詞派生の形容詞であるのに対し、「before」が名詞(空間名詞)派生であることも大きく関与していると考えられる。さらに(20a)に見られる「Next」はこれまで分析対象とされることはなかったが、これは空間、時間両領域において純粋に「順序」という意味を表す語である。又(20c)「previous」に関しては空間用法を持たず、時間的な順序関係のみをあらわす時間形容詞(碓井 2004)である。以上の要因から本稿では「順序」という概念を時間領域を考える上で非常に重要な概念であると位置づけ、この「順序」を介した時間認知を「静的な時間認知」と位置づける。(21)に示した日本語の相対名詞はこれまで時間の動的なメタファーによるものであると分析されてきたが、日本語「マエ」は空間名詞派生の相対名詞で

⁶ DIRECTION と DIMENTION の写像過程に関しては文化差によるところが非常に大きい。

⁷ これらを静的な順序であると位置づける根拠は、参照点として働く定冠詞の必要性やアンケート結果等による。

あり、動詞派生である英語の"following"のようにそこには時間の動きは感じられない。そこには認知主体の二つのイベントの順序関係をトレースする際のメンタルパスの動きが存在しているにすぎないのである。

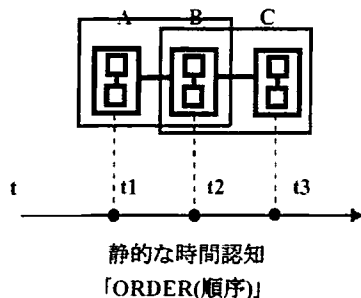
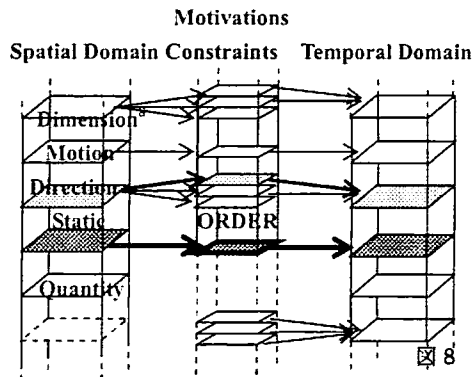


図 7



(20)や(21)の場合、図7に示したように時間を捉え言語化し、さらに図8のように空間と時間の持つORDERの側面とDIRECTION(FRONT-BACK AXIS)が写像の動機付けとなっている。

これまでは時間の動的側面を重視した分析が多くなされてきた⁹。時間を認知する際には必ずそこには「MOTION(動き)」があると考えられてきたが、分析の結果動きが感じられない静的な時間認知の存在性が明らかとなった。特に元来空間名詞だったものが時間関係を表す語へと拡張した場合その傾向が強いといえる。相対的な時間の順序関係を表す(20)(21)等はORDERという概念がMotivationとなり時間領域への写像が起こったと本稿では位置づける。次節ではこれまではMOMの一例であると位置づけられてきた形容詞を次元性と方向性という観点から分析を行う。

5.3. 次元的側面

L&J(1999)では形容詞はMOMの一例であると位置づけられてきた。本節では形容詞が時間表現へ写像される際、単なる空間や動きという観点からだけでなく、そこには次元性と方向性が大きく関連していることを明らかにする。これまで時間は一次元であり、一方向性を持つものであると考えられてきた。そして空間領域において二次元の要素を持つもの時間領域へは写像が起こらない(靱山(1995)¹⁰, 山田(1981), Fillmore(1997)等)とされてきたが、二次元・三次元の形容詞も一定の条件を満たせば時間領域へ写像が起こることがある。なぜそのようなことが起こるのか、類型論的観点から時間領域への写像の動機付けと制約を考える。

⁸ DIRECTION と DIMENTION の写像過程に関しては文化差によるところが非常に大きい。

⁹ 欧米諸語は時間を動的・線的と捉える傾向があり、それに対しアジア・アフリカ諸国は時間を静的・環的に捉える傾向がある。これまでは英語中心の分析が多かったため、時間の持つ静的・環的な特性は分析対象とはされてこなかった。

¹⁰ 「深い・浅い」は一次元的な形容詞であるとして時間表現に拡張可能であることを指摘している。

- (22) 「広い・狭い」「大きい・小さい」等の形容詞は、二次元(面)あるいは三次元(立体)の空間を表すことは出来るが、一次元(線)の空間を表すことは出来ない。
従って一次元的にのみ捉えられる「時間」へは転用できないということになる。
一方「遠い」「近い」「浅い」「深い」「短い」「長い」という形容詞は一次元的空間を表せることから時間へも転用が可能と言うことになる。(靱山 1995:636)

5.3.1. 次元形容詞

次元形容詞を多面的な側面から分析したものに国広(1982)がある。国広は次元形容詞を「ベクトルを持つものと持たないもの」に大きく二分し、さらにそれらを「線を含むもの」、「肉付けがあるもの」、「平面を含むもの」へと分類した。この分析を元に空間から時間領域への写像が可能である次元形容詞と、写像が不可能な次元形容詞を類型論的観点から分析を行う。

(23) 『ベクトルを含む(ある基点からの一方向性)』『ベクトルを含まない』

タカイ⇔ヒクイ	ナガイ⇔ミジカイ	線を含む
フカイ⇔アサイ	フトイ⇔ホソイ	
トオイ⇔チカイ	フトイ⇔ホソイ	肉付けがある
	アツイ⇔ウスイ	
	ヒロイ⇔セマイ	肉付けなし
	ナガイ⇔ミジカイ	
	*ヒロイ⇔セマイ	平面を含む
	*アツイ⇔ウスイ	

(国広 1982:168)

5.3.2. 二次元・三次元の時間表現

これまでの先行研究では写像が不可能とされた「高い」「深い・浅い」「太い・細い」「大きい・小さい」等の二次元、三次元形容詞と位置づけられる事例も(24)に示したように時間表現が見られる。また英語においても同様に「二次元形容詞 "deep" は時間表現としても使用される。

- (24) a. 年が**高**けている(長けている) → 二次元→Direction 有
 b. 秋が**深**まってきた → 二次元→Direction
 c. まだ日が**浅**い
 d. **太**い時間(太くて短い時間) → 二次元→線的
 e. **細**い時間(細くて長い時間) →
 f. 莫**大**な時間をかけた → 三次元→量的側面
 g. 最**小**の時間で処理した →

(25) deep in the Stone Age¹¹

¹¹ 前後軸を主に用いる英語では時間表現における上下軸は見られないと考えられてきたが、(7)の事例は

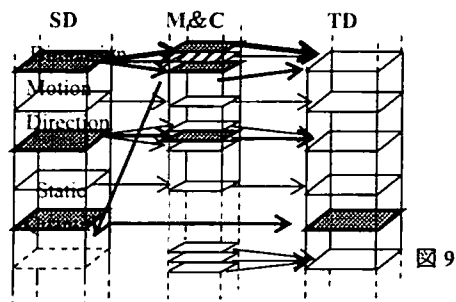


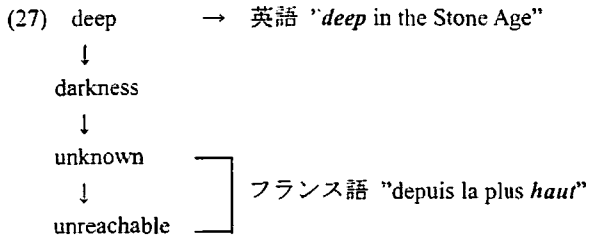
図 9

これらの事例から言えることは図 9 に示したように、次元性以外の要因である DIRECTION、QUANTITY や LINEARITY という側面を持ち合わせていれば時間領域へと写像が起こり得るということである。さらに時間の写像を考える際、単層ではなく多層構造の写像関係があることもこの図から明白である。しかし日本語において二次元形容詞である線的要素を持たず全くの平面である「ヒロイ・セマイ・アツイ・ウスイ」は時間領域に写像されない。二次元(線的要素を持たず全くの平面)であるということは時間領域への写像の際非常に強い制約となるようである。しかしこの制約の度合いは言語により多少異なるようである。(→(28)中国語)それに比べると三次元は時間の量的側面(図 3)と合致する為、時間への拡張は比較的容易であることがわかる。しかし中国語においては時間領域への写像の際強い制約となるはずの二次元形容詞が時間表現として使用されることがある。それが以下(28)に示したものである。まずは(26)英語とフランス語の次元形容詞の分布から見ていく。

(26) English	French
<p>deep</p> <p>*shallow</p> <p>*wide</p> <p>*narrow</p> <p>*thick</p> <p>*thin</p> <p>(*flat)</p>	<p>*profond</p> <p>*peu profond</p> <p>*spacieux</p> <p>*etroit</p> <p>*epais</p> <p>*mince</p> <p>(*plat)</p>
<p>big</p> <p>He finally made the <i>big</i> time.</p> <p>(彼はついに成功した)</p> <p>This time they've messed up <i>big</i> time!</p> <p>(今回彼らは非常に落ち込んでいる)</p> <p>small</p> <p>a <i>small</i> time crook (重要でない)</p> <p>high</p> <p>have a <i>high</i> time(楽しい時を過)</p> <p>deep</p> <p><i>deep</i> in the Stone Age (太古石器時代)</p>	<p>grand = big, tall, great, large</p> <p>Elle m'a fait attendre deux <i>grandes</i> heures.</p> <p>(彼女は私をたっぷりと二時間待たせた)</p> <p>personne d'un <i>grand</i> age (高齢者)</p> <p>petit = short, small</p> <p>une <i>petit</i> heure (小一時間)</p> <p>haut = high</p> <p>depuis la plus <i>haute</i> Antiquite (太古以来の)</p> <p>*profond</p>

まさに英語圏においても時間を上下軸を用いて概念化している証拠であり興味深い事例であるといえる。

(25)に示したように英語において“deep”は時間表現として使用されるが、フランス語において同じ意味を持つ“profond”は時間表現としては使用されない。しかし興味深い事に、英語の“deep”とフランス語の“haut”(high)に意味的な関連性が存在する。「太古」という「はるか昔」を表す際、英語は“deep”を用いるのに対してフランス語では“haut”(high)が使用される。両言語において「遠い過去」を表す際に使用された段階が異なっているが、軸は同じである(→(27))。両者ともに認知主体からの距離が遠く確認できない時代であるという意味で“deep”と“haut”を使用していることから、その認知形態は類似しているといえる。



英語において“big”, “small”, “high”は時間表現として使用されるが、この場合時間を直接修飾しているわけではなく「転移修飾」の一種、もしくは単なる「強意」と考えられる為今後さらなる分析が必要である。それに対しフランス語では“grand”と“petit”は時間の量を表す際に使用される。また“grand”は時間の量と長さ“personne d’un *grand* age” (高齢者)を表すことも可能である。次に中国語であるが、中国語においてはこれまでとは異なる分析結果がでている。

(28)	Chinese
深 [shen] 浅 [qian] 宽 [kuan] 广 [guang] *窄 [zhai] *厚 [hou] *薄 [bao] *平 [ping]	深秋 (秋たけなわ)・深冬 (真冬)・深夜 (12 時以降) 日子浅 (日が浅い) 宽限九天 (何日か期限を延ばす) 时间很宽裕 (時間がたっぷりある)
大 [da]	年纪大 (年上)・大白天 (真昼間) 大后天 (明々後日)・大前天 (一昨昨日) 等的工夫不大 (待ち時間は長くない(大きくない))
小 [xiao]	小日向午 (お昼前)・小字辈 (経験の浅い若者)

二次元 (線的要素を持たず全くの平面) であるということは時間領域への写像の際非常に強い制約となるということを先に示したが、中国語に関してはその制約である「二次元・幅

がある・平たい」という意味を持つ「寛」や「廣」が時間表現として使用されている。しかし二次元形容詞である多義語「寛」は「広い」の他に「緩い」や「延ばす」という意味も持ち合わせており、「ひろい→ゆるい→のばす」という意味拡張を経て、「延ばす」の意から時間表現として使用されるようになったと考えられる。しかし「廣」に関しては時間の量を表している為、二次元形容詞が時間表現として使用されている事実は否めない。中国語においてもフランス語等と同様に三次元形容詞「大・小」は時間の量を表す語として時間表現として使用されており、さらに「大」は時間の順序関係を表す「大后天(明々後日)」等にも使用される。又「大」は強意としても使用されている。

以上の分析結果から形容詞が時間表現として使用される際、次元性、方向性が非常に重要であることが明らかとなった。これまでは空間からのメタファーであるという点のみが指摘されていたが、次元性、方向性という要因がそこには大きく関与しており、さらに言語により制約が異なり差異が見られることも明らかとなった。時間は一様に一次元であり線的なものではなく、多くの側面を持ち合わせ二次元で幅のあるものとして捉えられたり、三次元で量的なものとして捉えられることもある。今後はさらに言語事例を増やし、言語ごとに見られる制約の違いと、多言語に見られる一般性を明らかにしていきたい。

6. まとめ

空間から時間への写像にはあるひとつの要因が起因となっているのではなく、図5に示したような様々な側面が多層構造を成しそれらが重なり合うことによって写像が起こっていることが本研究の分析結果により明らかとなった。これは L&J(1999)のメタファーを否定するものではなく、彼らは時間の空間的な動的な部分のみを分析対象としていたに過ぎないということを指摘したのである。時間表現を考えると単に空間からのメタファーであるとするのではなく、本稿で提示したような様々な要因が複雑に関連しあっているとしたほうがより実際の時間認知の反映に近いといえる。制約や動機付けには様々なあるが、次元という点においては平面である『二次元』は時間への写像の際大きな制約となり、また方向の面においては一方向性を持たない相対的な『左右軸』は大きな制約となることが明らかとなった。これまで二次元・三次元形容詞は時間へ写像されないと考えられてきたが、時間のそのほかの特性(方向性や量)を兼ね備えていれば時間への写像が可能なのである。ある時は Motivation となるものも、時には Constraint として働くこともある。空間のどの側面が時間へと写像されるかは言語により異なるが一様の傾向は見られるが差異も存在する。今後は言語ごとの制約、動機付けの違いと、これらの動機付けや制約間に階層性が存在しているか等をさらに分析していきたい。

参考文献

- Comrie, Bernard. (1976). *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard. (1985). *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, C.J. (1997). *Lectures on DELXIS*. Stanford: CLSI Publications.
- Joan Bybee, Revere Perkins, and William Pagliuca. (1994). *The Evolution of Grammar*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 国広哲弥(1982).『意味論の方法』, 東京: 大修館.
- 国広哲弥(1997).『理想の国語学辞典』, 東京: 大修館.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George. (1993). "The Contemporary Theory of Metaphor." In Andrew Ortony(ed.) *Metaphor and Thought* (2nd edition), pp.202-252, New York: Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1977). *Semantics*. Cambridge University Press.
- Moore, E.K. (2000). Spatial experience and temporal metaphors in Wolof. Berkeley: University of California doctoral dissertation.
- 初山洋介 (1995). 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際一意味転用の一方向性: 空間から時間へ」, 『東京大学言語学論集』, Vol.14, pp.621-639.
- Soteria, Svorou. (1993). *The Grammar of Space*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Sweetser, Eve E. (1988) "Grammaticalization and Semantic Bleaching", Proceeding of the fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society, pp.389-405.
- 谷ロー美(2003).『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』, 東京: 研究社出版.
- 碓井智子(2003).「空間から時間へ～アト(跡・後)の認知的観点からの考察～」, 『日本認知言語学会論文集』, Vol. 3, pp.63-73.
- 碓井智子(2004).「時間認知モデル: 時間の特性と写像の動機付け」, 『JELS』, Vol. 22, pp.231-239.
- William Croft. (1990). *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- William Croft and D Alan Cruse.(2004). *Cognitive Linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 山田進(1981).「機能後の意味の比較」, 国広(編). pp53-99.
- 山梨正明(1995).『認知文法論』, 東京: ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000).『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.